

その6「褒めること」と「諭すこと」

エピソード1 私の息子、娘はすでに成人している。たまに帰省してきたときに、うれしくてたまらない私は、ついつい缶ビールがすすんでしまう。空になるたびに、「〇〇、ビール持ってきて」と自分では立たずに子どもたちに持ってきてもらう。時には、冷蔵庫の中にある缶ビールがなくなるまで延々と繰り返される。しかし、3人とも、「はあ？」とか「嫌だね」などと拒否することはまったくくない。父にとって好都合な習慣には裏がある。それは、息子が小学校1年生位の時、初めて瓶ビールを運んできたときに「おまえは、えらい！」とおもいきり褒めたのである。それ以来、息子はビール運びに喜びを感じたようである。その様子を見ている2人の妹たちは右へならえで、自然に父にとってうれしい習慣を身につけたばかりか、栓を抜いてコップに注ぐようにまでなった。人は、褒められると人のために働くようになるようだ。

エピソード2 私は、たまに妻に弁当を作ってもらった時には必ず弁当箱をきれいに洗ってから持ち帰ることにしている。どんなに忙しくてもである。妻にとって好都合な習慣には裏がある。それは、弁当箱を洗って持ち帰ると、妻が必ず「えらい！よくやった」とばかりに褒めてくれるのである。当たり前のことをしているのに、褒められるとなんだかうれしくなり、次も洗って持ち帰る。人はどうやら、やって当たり前のことでも褒められるとうれしくなり、その行動を繰り返すようになるようだ。

エピソード3 平山小の子どもたちは朝のあいさつがとてもよい。校門に立っていると、ほとんどの子が「校長先生、おはようございます」とあいさつしていく。「あいさつがよい」と職員室で話題にすると、先生方は教室で「校長先生が褒めていた」という話をしてくれる。そうすると、次には、私より先にあいさつする子どもが増えた。また、褒めると、次には、遠くの方からでも「おはようございます」とあいさつする子が出てくる。もちろん、褒める。次には、2人で気をつけの姿勢で声を合わせてあいさつする。この2人は、ついには、被っている帽子をとって深々と頭を下げながらあいさつをするようになった。しかも、朝出会うたびにである。この2人は、1年生の咲那ちゃんと海吹ちゃんである。時々、真歩ちゃん加わる。また、1年生には同じようにていねいなあいさつのできる子がたくさんいる。どんどん、増えてきたというのが正しい表現だろう。これは、担任の松浦先生が、「校長先生が褒めていたよ、「あなたたちえらいね」とその都度、子どもたちを褒めていたからである。褒められると、人は進化するようである。しかも、よい習慣がまわりにも広がっていくようである。きりがないのでエピソードはこれで終わります。

私の経験から「褒めることの効用」をまとめると次のようになる。「褒められるとうれしくなり、もっとがんばろうと意欲が高まる。」また、「褒めてくれる人（親や教師）に対しては、信頼感が生まれ、素直になれる。」さらに、「褒められることは認められることであり、自己肯定感が高まり、自分に自信が出てくる。ひいては、物事を前向きに考えるようになり、明るい未来を自分で切り拓いていくようになる。」一方、褒める側の効用にも少し触れると、「褒めるとなぜか気分がよくなる。気分が良くなると、表情が和らいだり、人に優しくなれる。その結果、人間関係が良くなる。子どもも素直になる」

もちろん、褒めることと甘やかすことは違います。子どもの言いなりになることはもってのほかです。「ダメなことはだめ！」と毅然と叱ったり、わかるように「諭す」ことが大切だと思います。本物の愛情には厳しさが隠れているものですし、叱られたり、諭されるから子どもが「本当に自分のことを考えてくれているのだ」と気づくのではないのでしょうか。

褒めることも叱ること、諭すことも大人からのメッセージです。「あなたが大事なのです。かけがえのない存在として」という。

最後に、褒めることは意識しないとなかなかできないものです。「そうであって当たり前」という考えが知らず知らず身にしみてしまうと、大切なお子さんは「褒められることの少ない、自信の持てない子ども」になってしまうかもしれません。親も教師も心していきたいものです。